

Features for the Future, The 1st Kanazawa University Symposium on the Research of the Future: Institute of Medical, Pharmaceutical and Health Sciences "Nutrition, Exercise and Environment for Preventing Disease"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17595

『学会開催報告』

Features for the Future 第1回金沢大学未来開拓研究公開 シンポジウム—医薬保健研究域 「病気を予防するための食と運動と環境」

金沢大学医薬保健研究域長 山本 博

第1回金沢大学未来開拓研究公開シンポジウム—医薬保健研究域の部は、ときおり粉雪の舞う平成21年1月24日(土)、石川県立音楽堂邦楽ホールを会場に、330名の参加者を得、盛會裡に開催されました。

冒頭中村信一金沢大学長から「Features for the Future」と謳いましたように、このシンポジウムは、今年度新しくスタートした金沢大学の三つの学域・研究域がそれぞれどういうつよみを持ち、何を目指しているかを内外にアピールするため、大学として行う事業です」との趣旨が述べられました。

つづいて研究域長からシンポジウムの内容と構成の概略を次のように説明しました：テーマを「病気を予防するための食と運動と環境」としました。「上医ははまだ病まざるもの病を治す」との蘆思貌の言葉に象徴されますように、古来予防は医学においてもっとも尊ばれてきたところですが、健康の実体は未だ必ずしも明らかでなく、健康維持方法の解明も含め、予防の科学的基盤を打ち立てることが現代医学に課せられています。医学、薬学、保健学の三分野が融合、連携する金沢大学医薬保健研究域の創設は正に時代のニーズに応えるものであり、医薬保健研究域は予防の科学を推進する拠点となるべきミッションとそれを実現しうる人的知的資源をもつと考えられます。本シンポジウムは、研究域が擁するこの領域のトップランナーとその仕事の紹介、厚生労働省からの金沢大学への提言、スポーツと食育に関する二つの特別講演から成ります。

セッション1「予防するための環境」は薬学系木村和子教授によって司会されました。

医学系金子周一教授の講演は「肝代謝病を予防する」と題して行われ、肝臓はかつて従来云われたような「沈黙の臓器」ではなく、糖尿病や脂肪肝の病初期からさまざまなシグナルを活発に発信しており、これを的確に捉え矯正することで生活習慣病の進展を未然に防ぎうることなどが述べられました。

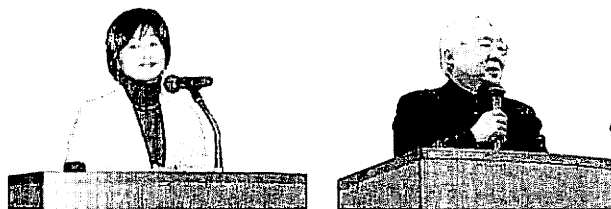
医学系中村裕之教授は「アレルギーを予防する」と題し、アトピー性皮膚炎、喘息、花粉症などのアレルギー疾患の予防に関して、疫学、免疫学、環境科学など多角的な観点から、同じアレルギーに対してもアレルギー発生率は都市部が高く、これには化学物質を含む環境影響が寄与していることを示すとともに、未発症段階からの予防の重要性を強調しました。

薬学系早川和一教授の講演は「呼吸から入る有害化学物質と健康影響」と題して行われ、大気中浮遊物質濃度の測定から、石炭燃焼などで発生し中国から飛来する多環芳香族炭化水素によって日本の多環芳香族炭化水素濃度が約10倍押し上げられていることが明らかになったことや、今後このように大量に長距離輸送される化学物質が生態系やヒトの健康にどんな影響を及ぼしているかを明らかにする必要があるとの提言が述べられました。

セッション2「予防するための早期発見」は医学系谷内江昭宏教授によって司会されました。

医学系絹谷清剛教授は、「早期発見によりがんを予防する」とのタイトルの下、がん撲滅における早期発見・治療の重要性を説くとともに、新しい核種化合物を用いたポジトロン共鳴断層撮影(PET)技術を紹介し、この導入によってがんをより早期に高感度検出することが可能になるとの展望を示しました。

保健学系真田茂教授は、「健康レベルを画像で測って病気を予防する」と題し、連続撮影したX線画像をデジタル解析することで、心臓の拍動や肺呼吸などのダイナミックな状態を可視化、定量評価する、「動くレントゲン」技術と、呼吸等に伴う



腫瘍の動きも三次元的にリアルタイムでとらえて放射線照射療法をさらに至適化するなどの応用例を示しました。

薬学系横井毅教授の講演は「遺伝子診断による薬の副作用予防」と題して行われ、薬物代謝酵素シトクロームP450をコードするCYP遺伝子多型を中心に薬の副作用、とくにわが国でも少なからぬ死を招いていると推定される薬物間相互作用発生のメカニズムが解説され、これを防ぐ対策についての構想が示されました。

医学系東田陽博教授の講演は「こどもの心の科学と早期発見による疾病予防」と題し、CD38遺伝子欠損マウスがヒト自閉症に類似した病態を示すことを突き止め、さらにその原因がオキシトシンの分泌不全にあり、オキシトシン投与で自閉症様病態が改善されることの発見や現代社会が悩まざるさまざまな心の問題解決への将来展望が示されました。

厚生労働省佐原康之医政局総務課医療安全推進室長は「厚生労働省からの指定発言」として、まず、天然痘と肺がんを例に予防の役割について概説し、つぎに、国の「健康フロンティア戦略」とその中の九つの重点分野(こどもの健康、女性の健康、メタボリックシンドローム克服、がん克服、心の健康、介護予防、歯の健康、食育、運動・スポーツ)について説明し、最後に、金沢大学への要望として(1) 知の拠点たること、(2) 地域への貢献、(3) 世界への発信の三点を強調しました。

特別講演1は保健学系須釜淳子教授によって司会されました。

講演者は、世界女子柔道選手権大会で日本女子として初の金メダルを獲得し、現在全日本柔道連盟女子強化委員も務める山口香筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授(写真左)、山口先生は「スポーツと健康-気づき、感動、行動」と題し、自分のからだが一番身近な自然であり、スポーツとはそれに気づかせてくれるもの、運動の実践によって感動が生まれ、これらが私たちを健康にしてくれると説きました。

特別講演2は烏帽子田彰広島大学大学院医歯薬学総合研究科教授によって司会されました。

講演者は、内閣府食育推進会議委員の服部幸應学校法人服部学園理事長・服部栄養専門学校校長(写真右)、服部先生は「食育のすすめ大切なものを失った日本人」と題し、「食育」とは食と教育であり、食材を含めた食の健全さ、食作法、食の健康影響などの要素からなる、ゼロ歳から二十歳まで年齢に応じた食育がある、とくに親子関係や社会性を涵養するうえで昨今失われつつある食卓でのしつけをとり戻すことが日本と日本人にとって大事だと強調しました。

以上のように、シンポジウムは所定のプログラムどおり順調に進行し、午後6時30分すぎ、研究域長の閉会の辞をもって閉会しました。

本稿を了るにあたり、まず、すばらしいご講演をいただいた先生方と座長の労をおとりいただいた先生方に深甚の謝意を表します。いずれの講演、チェアマンシップもこの方をお願いしてよかったと思われたことでした。つぎに、本シンポジウムは学長戦略経費による支援をうけました。中村信一学長はじめ関係各位に御礼申し上げます。つぎに、準備、設営、運営にあられた実行委員会と事務部の各位に御礼申し上げます。シンポジウムを滞りなく有意義に、また好評裡に開催できましたことは各位のご協力のお蔭です。とくに中村裕之教授にはひとかたならぬお世話になりました。中村教授の冴えた立案ときめ細やかなコーディネートなしにはシンポジウムの成功はありえなかつたと感謝しています。最後に、ご後援いただきました金沢大学十全医学会ほかすべての団体に御礼申し上げます。